

Title	概念と表現
Sub Title	
Author	西脇, 順三郎(Nishiwaki, Junzaburo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1930
Jtitle	哲學 No.7 (1930. 12) ,p.139- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000007-0139">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000007-0139</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 概念と表現

西脇順三郎

## (一)

言語が記號である以上は、その機能は記號することに止まるものである。記號である以上は常に何物かを記號する材料である。記號と記號の對象とは屢々混同される。哲學乃至心理學などにも、此の混同が屢々注意されるものである。のみならず文學評論などにも混同されてゐる。

言語の記號は對象を記號する。對象は識別である。言語記號の識別によりて、意味の識別を記號するものである。而して意味その物を記號するのではない。

記號の識別が歴史的變化によりて、不完全となり或は皆無となる場合は、その識別も屢々不完全となる。言語が屢々、Contextによらなければ意味の識別が出来な

いことのあることは、是等の場合である。

言語記號の識別の組織は、音質、音量、音の高低及び強弱、音の速さ、音の *timbre*、アクセント等の識別、及び *intonation* 又は所謂 *Sentence-stress* と稱するもの、又は *tempo* 等に於ける識別などである。また記號の聯結の順位の識別も大切である。此の最後の識別に關しては、Ditrich 教授の *Aussagelaute* とか De Saussure の *Image acoustique* とかは不完全な説明である。

言語記號の識別は何を識別するものであるか。この問題は複雑なものであるが、前述せる如く、意味を識別することと簡単に考へて置く。けれども意味とは如何なるものであるかとの問題となる。この問題に對する解答は後から述べることにする。言語學では意味と記號との關係を研究するものであるが、意味それ自身の性質の研究は寧ろ哲學に屬すべきものであると思ふ。

次に言語と文字とを混同する人達は餘りないが、念のために記號を論ずるに當り此の混同を避くべきであることを一言する。文字は言語記號の記號であつて、要するに記號を更に記號する記號であるに過ぎない。

Ogden 氏と Richards 氏との共著「意味の意味」とか Richards 氏の Practical Criticism 及び「文學評論の原則」とか Paulhan 氏の La Double Fonction du Langage などには言語といふ意味が餘り廣大された範圍を有し過ぎてゐる點がある。言語と言語の對象とを混同する點が多い。

De Saussure は「言語記號が識別する對象は概念 (Concept) であるといふ。これに對して非難がある。勿論言語記號が識別するものは概念のみでない。例へば *signification* の識別は感情などを識別する。けれども言語記號の識別の重大なるものは概念である。思考(理解、意志、想像、感情等)の精神の活動を表現するに用ひられてゐる重要なものは概念である。

先に言語記號は意味を識別するといつたことは假りに定義せしことであつて、不完全なものである。しかし概念のみを識別するものでないといふことを考へたから意味といふ言葉を用ひたものであるにすぎない。その意味といふ意味は、概念と感情等を含ませる見方であつた。けれども意味といふ術語は不完全である。尙、この管見では概念の場合に重きを置いて考へてみる。

意味といふことは私見としては、表現乃至象徴といふことが最も適當なものと考へる。この點から考へる時は、言語記號は意味を識別するのでなく、思考の世界を意味する乃至表現するところの概念を識別するものである。

思考の世界を表現乃至意味するものは概念の世界と音の世界である。後者の世界即ち音の世界とは、言語記號の有する音を應用して詩人などが印象的に思考の世界を象徴せんとする場合である。しかし此處では概念の世界の表現のみを考へることにする。

言語記號の研究に概念のみに重きを置くことに對して反對する人達もあらう。けれども言語記號の發達の研究者としての言語心理學者は餘りに、例へば Steint-hal の如く) Reflexbewegung にのみ重きを置くことは誤りである。言語記號の發達の原因として大切なるものは概念活動であると思ふ。記號の識別は大部分概念の識別である。識別された感情でなく、概念である。

shi といふ記號は、私見としては、一つの概念の形態であると考へなければならぬ。論理學で概念として考へられてゐるものは多く普通名詞、形容詞、或は動詞

などである。感歎詞とか onomatopoeia から出来てゐる記號は概念を構成することになつてゐない。

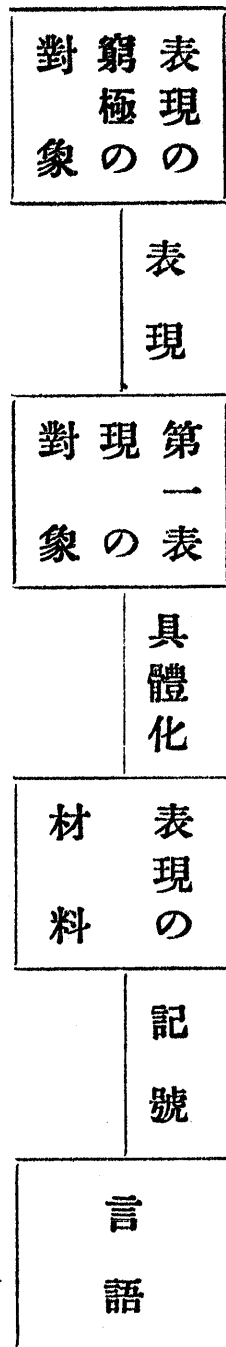
要するに言語記號の發達史を考へる學者は餘りに野蕃人や小供の言語を考察する場合、概念活動がないものとして考へすぎるところがある。言語記號の識別が存在するためには何等かの形に於て概念の活動があるものと考ふべきものと思ふ。

## (二)

前述の「意味の意味」の書中にある「意味」といふ意味を、自分は「表現」といふ語を用ひることにする。哲學作品又は文學作品は表現の世界を提供してゐるに過ぎない。換言すれば、表現といふ見地からみれば、其等の作品自體は表現の世界である。少くとも表現を通過せざるを得ない。

表現の對象とは如何なるものであるかの問題は非常に困難なるものである。その理由は先づ、人間が表現行爲をなす窮極の目的となる對象は何物であるかの

問題は哲學のみならず一般藝術上の取扱ふべきものである。吾人が考へたり、感じたりすることは、結局何物かに對して或は關して表現行爲をなしてゐるやうに私には感ぜられる。或る哲學者は神とも考へたり、物質自身とも考へたり、私見としては、一つの *Weltanschauung* を作らうとすることであると考へたりする。私は此處では、此の窮極の對象に就いては論ずるものでなく、表現それ自體に就いて、その作用のメカニズムを考へてみたいと思ふのである。言語を使用する場合の文學又は哲學作品に就いてのみ考へるのであつて、繪畫、彫刻、音樂等の如く表現材料の異なる場合を除くものである。先づ簡單にその順序をあげれば次の如くなる。



「第一表現對象」は表現者の *Cogitatio* の世界であつて、表現の材料によつて具體化されてゐるものである。窮極の表現對象に對しては第一表現對象は更に表現形態ともなる。

「表現の材料」は言語によつて更に具體化されてゐるものであるとする。

「第一表現對象」の世界はデカルトの *Cogitatio* の世界であつて、理解、意志、想像、感情等の精神活動を含むものとする。外界の世界に關係があるが、しかし外界そのものでないものとする。文學評論からみれば、Richards 氏の「意味の種類」——即ち *sense, feeling, tone, intention* 等も含まれてゐることになる(同氏著 *Practical Criticism* 參照)。

此の「第一表現對象」を表現乃至象徴するに用ひらるゝ材料が「表現の材料」である。此の「表現材料」の世界は

(一)概念の世界及び(二)音の印象の世界から構成されてゐる。音の印象の形態は文學作品に多く應用されてゐる。哲學、科學の表現には餘り用ひられてゐない。

此の「概念の世界」は言語によりて記號されてゐる。「音の印象の世界」は言語記號の有する音によりて提供されてゐる。

註、文學では印象による象徴もあるが、此處では重要でないから省略する。



(三)

「表現材料」の使用さるゝ対象は「第一表現対象」である。「第一表現対象」は *Cogitatio* である。その意味は、*Cogitatio* 自身は、私には、表現の一つの形式に過ぎないと思はれる。考へたり、感じたりすることも、意志を働かすことも、自分には表現である様に考へられる。あらゆる精神活動は表現であると思はれる。自分には、*exprimo*, *ergo sum* であるやうに思はれる。純粹哲學は此の表現の窮極の対象を求めるところが目的であるやうに思ふ。此處では、この問題を取扱ふのではないが順序として一言するに止まるものである。表現といふ觀念は、藝術論や文學評論に多く取扱はれてゐるけれども哲學には少ない。表現といふ見地から哲學は未だ深く考へられない世界を展開し得るものと思ふ。

美に關する問題なども、或る物に對して美を感じずるといふことは、或る物に對して或る表現行爲をなすことに過ぎないとも思はれる。

(四)

表現材料の世界に關して先づ概念の問題である。表現といふ見地からみると、概念は機械又は材料にすぎない。概念は、精神活動の對象になることがあり得るが、精神活動乃至 *Cogitatio* の種類にはならない。全く表現に使用されてゐる材料に過ぎない。精神活動の作用又は見地によつて決して變化することの出來ない *Form* である。

概念の問題は論理學や認識論などでは複雑なものであるが、表現といふ見地から見ると、丁度彫刻に於ける、その材料としての大理石などに當るものが概念である。その大理石に形を決定するものは「第一表現對象」である。

註、概念の獲得は言語と密接の關係がある。

次に、「音の印象の世界」としての表現状態はポエジイなどに多く用ひらるゝものであるから哲學作品などでは全く考へられない。言語記號の有する音を表現に使用するものである。丁度大理石の光澤とか色とかに當るものである。

此の如き材料を提供するものは言語の記號である。言語は概念を識別することによつて概念を記號する。Bertrand Russel氏は「Pronouns は個別的であるが不明瞭なものである」といふ。けれども言語學からみる時は Pronouns は Common nouns よりはまだ遙に普遍的であると思ふ。所謂「文法的概念」は普通名詞よりは一層關係的概念を示すものである。

次に概念と思考との關係は、前者は思考を表現するに用ひらるゝ材料に過ぎない。兩者は少くともその機能に於て全く異なる存在である。私見としては、概念といふことは表現といふ見地を離れては説明が出来ないやうに思はれる。

註、固有名詞も必ずしも特定對象がない。例へば Robinson といつても直ちに普通名詞と同様に特定されてゐないものである。矢張り概念的なものである。

(五)

再び「第一表現對象」に關する問題に移る。

自分が感じたり、考へたりすることは既に何物かに對して表現行爲をなしてゐ

るものであると思ふ。此の何物とは二つの場合がある。先づ、Ditrich教授の *Aussagegrundlage*「Tatsache」と稱し得るものがある(同氏の *Die Probleme der Sprachpsychologie* 参照)。此の表現の對象は「第一表現對象」の領域中に位置するものであると思ふ。私の前述せる「表現の窮極の對象」とは「第一表現對象」が更に表現の形態となつた場合の其の對象である。

「第一表現對象」は *Cosmos* の世界である。此の世界全體が有する表現の對象と、その世界に含まれてゐる一つ又は多くの對象とを區別すべきである。即ち「第一表現對象」の中にもそれ自身の對象がある。此の種の對象を Ditrich 教授が *Aussagegrundlage* と稱するものゝ様に思はれる。私のいふ「窮極の對象」といふ意味は、結局一つの *Weltanschauung* のことを考へてゐるものである。

## (六)

表現の對象といふことに二種がある。或る物(1)に關して表現された物(2)がある。第一の物と第二の物とを混同すべきものでない。私見としては、表現された

物が表現の對象であると思ふ。この見地からみると、表現の對象の存在は表現以前に存在するものでない。表現があつて初めて其の對象が表はれて来る。勿論表現の關する或る物は表現以前に存在するものであるが、或る物(1)と其の物に關して表現された物(2)とを混同すべきものでないと思ふ。

此の意味にて、表現するといふことは、對象を創造することであつて、對象を複寫することでない。表現の存在以前に對象が存在すると考へることは、一つの *illusion* に過ぎなく、丁度、風見が南を指ざした理由によつて風が南の方向へ吹き始めると考へるに等しい。

また、思考する以前に思考があり、感ずる以前に感ずることがあると考へるものに等しい。勿論、此の場合にも、「或る物に關する」といふ其の物は思考する以前に存在するものであるが。

(七)

表現は與へられた同一の時間に於て、二つの異なる表現が出来ない。これは論理

學などの問題であるが、表現から見るときは明かな事實である。(勿論皮肉の言ではあるが二人以上の表現者の場合は此の限りではない)。

單に異なる、或は反對の表現が出来ないといふのみならず同一の表現を二個同一の時間に於て表現が出来ない。

此の現象は言語の性質からみても、必然的なことである。言語を使用する以上は、その表現も同様時間に於て制限をうけるものである。

## (八)

知るといふことは表現することに過ぎないやうに思はれる。例へば、眞の存在に關して本當の表現は何んであるかの問題がある。「本當のテーブル」を知ること換言すれば「本當のテーブル」を表現するには如何なる立場から見た表現であるかの問題である。この種の問題は認識論や藝術論に關係があるもので此處で取扱ふことは私自身の不能力である爲めに、單に暗示に止まらざるを得ない。詩人が與へられた對象を表現する場合に起る疑問でもある。要するに表現の立場を決

める根本問題である。此の立場の如何によりて展開される表現された世界が異つて来る。此處に絶対の表現といふ哲學に於ては絶対の知識に相當する考察が可能となるものであると思ふ。

## (九)

表現の様式を大體二大別すれば *intellect* と *intuition* になる。是等は表現の精神活動の二大別とも考へられる。是等の問題に關する議論を幾分私見として批評を許されたい。私は先づ兩者の表現は、それ自身完全なものであると思ふ。兩者は共にデカルトの *Cogitatio* の世界に屬するものである(デカルトの哲學原理第九参照)。

*intuition* を非難する學者の理由の一つに(例へば Hocking 教授の *Types of Philosophy* 第十五章)言語は概念から出來てゐるから、*intuition* はその知覺せし物を傳達することが出來ないといふ。同氏の誤解は概念といふことゝ思考とを混同することからではないか。概念は思考を表現する材料であつて、思考作用それ自身ではな

5. intuition は概念によつて表現が出来ると思ふ。同氏の説から考へれば文學の作品を全部否定しなければならぬ。尙、同氏は「Conceptual thinking」といつてゐるが、矛盾してゐるものか、或は思考と概念とを明確に區別してゐるものであるか、である。

概念は思考を表現するに用ひられてゐる材料であつて全く機械的な材料にすぎない。吾人が言語獲得と共に得た全く外面的な表現材料にすぎない。

intuition は單に概念によつて表現することが出来るのみならず音や形や色によつても表現が出来る。

概念は精神活動そのものでもなく、intuition に相反するものでもない。

概念それ自身は第一表現對象即ち思考を表現するに用ひらるゝ材料にすぎなく、丁度彫刻家の大理石自體にすぎない。intuition による思考の世界を表現するものは概念でなく第一表現對象としての思考の世界である。概念は單に、その表現を具體化する材料にすぎないと思ふ。

勿論 intuition 自身は既に表現であり、表現されたものである。



概念は表現でない。單に表現の材料にすぎない。概念は intellectual なものでなく、また intuitive なものでもない。其等のどちらをも表現するに使用される材料にすぎない。

概念を intellect の活動それ自身と混同することが出来ない

「光る」といふ概念は、その使用される場合によつて、理知を表現するときも、*sensation* の感じを表現するときもあり得る。また兩者を混入する場合もある。

實際の心理的經驗では、物を認識する場合、純粹に *intellect* ばかりの認識もなければ、*intuition* のみの認識もない。事實兩者が混入されてゐるものであると思はれる。概念は認識の對象となり得るけれども、それ自身何等の定つた精神活動の種類でない。

概念は精神活動を表現(具體化する)するに使用される象徴形態である。

言語が象徴形態であるといふ意味は間接である。即ち言語は概念の識別を象徴する象徴形態であるにすぎない。(勿論、言語記號の音を利用して精神活動を直接に象徴する場合は、言語は直接の象徴形態であるとも考へられるが、しかし、その

場合は言語記號そのものゝ象徴でなく記號の有する音が象徴形態となるものである。カスイラ教授の場合、言語を象徴形態とされるが、後者の場合の意味ならば適切であるが、概念が象徴形態であるといふ見地から論ずる場合は、確に異なる結果を出すことになるであらう。

私見として、言語が象徴形態であるとするよりも概念が直接の象徴形態であると考へるものである。

次に、言語を表現の材料に使用してゐない繪畫、彫刻、音樂には概念象徴と稱せられるものは不明である。しかるに、屢々其等を論ずる場合、概念といふ觀念を用ひられることがある。

次に文學では多く概念を表現の材料とすることは勿論であるが、文學ではまたそれ以上に言語記號の音それ自身を審美的の效果を出すため、または印象上の暗示として使用することがあることは先に述べた。文學的表現者は、美しい記號を用ひることを企てゝゐる。

(十)

一つの思考は他の思考によつて代用することが出来る。換言すれば一つの表現は他の表現によつて代用することが出来る。代用の作用の發生には、相互の間に何等かの相似性があるか(1)、正反對の性質があるか(2)、或る相似性が皆無であるのみならず何等の關係がないか(3)の三つの場合を考へることが出来る。

また代用に用ひらるゝ精神作用としては、論理的代用か、或は印象的乃至暗示的乃至象徴的代用を考へることが出来る (前者を *scientific language* 後者を *emotional* とか或は *figurative language* としふ人があるが、言語としふ言葉を用ひることは正確でない)。

「私のパイプの火が消えた」といふ思考を表現するに「私のパイプの火がついた」といふ思考で表現した場合は、正確に表現されてゐるならば、それは *ironia* である表現で(2)の場合である。この場合、若し「君、今日散歩に出ますか」といふ表現を以て代用した場合は、(3)の場合であらう。此の時は最早や多くの場合、代用の表現が消滅

したものと考えなくてはならない。

次に 『a hand is put in front of the woman's eyes ; against the sunlight she sees the fingers bright as red, as though they were branches of coral』と云ふ思考を表現するに 『Quand je lui dis : "Prends ce verre fumé qui est ma main dans tes mains, voici l'éclipse," elle sourit et plonge dans les mers pour en ramener la branche de corail du sang』と云ふ思考をもつてする場合(1)の場合であつてそれは、metaphoraとか allegoria と修辭學などでいふところのものである。註、この事は Huxley 氏の書 Proper Studies の中にあつたものである。

次に表現の自由といふことに關して、「三角の圓」とか「雨が降つたけれども地が濡れた」などは表現自身からみれば完全である場合があるが、他の關係から即ち數理とか論理からみれば誤であることは考へられる。

完全といふことは、表現者が若し故意に數理に反したことを表現せんとしたり、論理を輕蔑するため表現した場合、表現者にとりては完全な表現で、その目的を果してゐることになる。

故に表現者の見地からみることとも思考の表現を客観することになる。論理的論者は常に一方的にのみ観る弊害がある。此の種の表現は科學的表現ではないかも知れないが、しかし文學作品には完全な表現となる場合である。また完全な思考でもある。

次に概念の聯結即ち概念と概念との關係が論理的乃至常識的に不明な表現材料の場合はそのによつて表現されてゐる思考の世界は不明瞭なものとなり傳達力の弱いものとされてゐる。しかし若し表現者が故意に不明瞭なことを目的とせし時は、同様な理由によつて、その表現も傳達も完全なものである。此の場合には科學的な表現には適するものでなくとも、文學作品としては、完全な思考の表現である。

## (十一)

最後に再び表現の對象といふことを考へてみる。或る物に關して思考された物が、表現の對象であつて、其の「或る物」が表現の對象ではない。けれども多くの言

語學者及心理學者には、その「或る物」が表現の對象として考へられてゐる。この種の對象は *Satzobjekt* にすぎなく、表現者からみた對象でない。或は英語などの *subjectmatter* とか表題といふ觀念にすぎない。丁度作品と其の表題とを簡単に混同してゐるものである。また *Dierich* 教授の例をとるが、その *Tatsache* は不明である。表現者の表現の對象は、或る物に關して表現されたものであつて「或る物」其自體でない。例へばロダンの「考へる人」は表題にすぎなく、表現の對象は、作品それ自身である。

(そのまた作品は窮極の對象に對しては表現の形態としての材料乃至方法となる。) 表現の對象は作品それ自身であると考へることは私のみの獨斷でない。例へば *Charles Mauron* 氏の言「主題があつて、作品はその主題を表現すると考へることは誤である」を暗示する。